

第 184 回 山形県社会教育委員の会議議事録

期 日：平成 30 年 9 月 20 日(木)

時 間：13:30～15:30

場 所：県庁 7 階 701 会議室

1 開 会

2 山形県教育委員会挨拶（澁江教育次長）

3 出席者紹介

4 座長選出

齋藤委員を選出

5 議 事

(1)平成 30 年度主要事業の進捗状況について

資料説明（事務局）

質問・意見は特になし

(2)平成 31 年度主要事業の方向性について

(ア) 討議の進め方について(事務局)

(イ) 各委員からの意見・要望等

①家庭教育・幼児共育・読育 等

小林委員

家庭教育関係の 1 番目に書いてある「子どもの生活習慣について」というところを書かせていただいた。やはり子どものスマホ依存、子どもに限らず若い世代全般に言えるかと思うが、スマホにあまりにも過度に傾注している、その傾向を大変懸念しており、家庭教育の中でも、この対策に取り組んでいって良いのではないかと考えている。決してスマホの利便性を否定するものではなく、あまりにも偏りすぎた場合に、様々な弊害が出てくるということは、ニュースでも出てきているところである。生活習慣の乱れ、体調の乱れ、学力の低下にも繋がるだろうし、また先日は、他県でスマホを操作しながら自転車に乗って、歩行者の死亡事故を起こしてしまい裁判となり、女子大生に有罪判決が出るということもあった。このように、社会生活の中でも様々な弊害が出ているということを考えれば、家庭教育、社会教育の中でも、何らかの形で手を打ってよいのではないかと考えている。その意味で、先程御説明があった P T A 研

修会で専門家の方の講演が予定されているということにも期待したいし、県の家庭教育アドバイザーの皆さんの中にも取り上げている方もいらっしゃるようなので、機会を捉えてぜひ親御さんに注意を喚起していただきたい。また、スマホから離れる、スマホを全く手に取らない時間を設けて、それ以外の魅力、リアルな世界に目を向けさせる機会、例えば講座でもよいし、キャンプでもよいし、そういったものを意識的に設定していくことも効果的ではないかと思う。

廣木委員

私は3番、4番のところを意見として出させていただいた。その中にも少し書かせていただいたが、インターネットからの情報が、家庭教育とも大きくリンクしてきているのではないかと考えている。たくさんの情報を気軽に手に入れられるということに関しては、インターネットを活用するということが、これからますます取り入れられていくのだろうと考えているが、反面、インターネットの多すぎる情報が不安を煽ったり、「インターネットにはこう書かれていた」ということが、特に私が普段関わるような発達障がいを持っているお子さんに関して、障がいのイメージばかりが先行してしまうなど、デメリットの部分も大きく感じている。第5次生涯学習振興計画の中に「多くの親が、学びの機会の充実と気軽に集まったり相談したりできる体制の整備を求めている」という文言があったが、情報がたくさんある反面、直接顔を合わせて情報を得たい、自分の話も聞いてほしいというところ、インターネットに載っている大人数に対して発せられた情報ではなくて、個人個人に合わせた情報を求めているというところもあるのかと考えていた。インターネットを上手く使いながらも、顔を合わせて行う支援や、たくさんのイベントや研修の機会を設けることは、大変貴重であると感じている。

4番はそのことに関連して、せっかくこういったイベントや企画があり、直接やりとりできる場があるのだから、その場を具体的に子どもたちの経験を積む機会として活かさないかと考えて書いたものである。いろいろ課題があって、取組みについて検討が必要かと思うが、例えばイベントの申込みをする時に、子どもが直接申込みの電話をかけるなど、なかなか子どもの頃には機会がないと思う。私自身子どもの頃、例えばお店で品物が見つからないと、お店の人に自分で聞いて来なさいと言われて、嫌だなと思った記憶があるが、大人になってみると、分からないことを大人に聞けるという経験があったからこそ思っている。そういった機会を、自然に家庭教育の中でやることは大切だと思うが、社会教育として捉えて実践する具体的な場の設定も、必要になってくるのではないかと考えている。

齋藤座長

最後の問題で、少年自然の家の色々な事業があるわけだが、その時の申し込み方法をもう一度考え直してみる、親からの申し込みではなく、子どもたちが自分で申し込むということができれば面白いなと感じた。ぜひ自然の家にも、このような意見を伝えていただければと思う。

高橋一枝委員

私は、読育の推進ということで、2ページから3ページにかけて意見を書かせていただいた。ブックスタートについては、ほぼ全ての市町村で取組みがなされているところだと思う。その次のフォローアップ事業も、いろいろな状況の中で、かなりの割合で各地区が努力されている

と思う。新庄市で実施している事業が、ブックスタートの後の2歳児歯科健診での本の貸出と読み聞かせである。それから先程、就学時健診で子育て5箇条のパンフレットを、という話があったが、新庄市でも就学時健診の中で、読み聞かせサークルのお母様方がおはなし会をすることで、子どもたちに絵本の大切さやお話の良さを啓発しながら、保護者の方に向けて、さらに読書の意識づけを行っている。読み聞かせに対する関わりの中で、お母様方も体験してみませんかということでお知らせしており、3年目になるが、大変好評を得ていると感じている。

それから、先程の読育推進連携講座について、最上地区でプラネタリウムの体験と星座・七夕にまつわるおはなし会を、出前図書館にすることで、体験型の読書を通じて、絵本とは違う形で身近に感じるお話、読書につながる気持ちが伝わったのではないかと考えている。この事業については、予算を少し膨らませながら来年度も継続ということで、そこは大事なところなのだと感じた。体験型の読書やおはなし会は、図書館や学校だけではなく、違った機関との連携を通して、全ての地区で行われるということがとても大事なのではないかと考えている。図書館は社会教育施設ということもあるので、いろんな状況の中で、ぜひ市民の皆さんに図書館を利用していただきたいと思う。ふるさと学習、郷土愛を育むという点では、図書館には郷土資料がたくさんあり、その地区で活躍された方、偉人の方の関係資料などを集めているので、そこで体験して学んでいただくことで、地域のこと、郷土のことを知ることにもできる。そういったところとの連携を図りながら、ふるさと学習も行っていただけたらと考えている。

新関委員

私も、資料2の1ページ「家庭教育の必要性について」ということに関して意見を書かせていただいた。食べる喜びということに関して言えば、本来は食べることで幸せになってほしいが、今のお子さんは本当に食が乱れているという話をよく聞く。自分で作ったものを自分が食べるという形で、食の大切さ、面白さに気づいていただきたいという思いで、みそ作りや漬物作りなどを20年近く行っている。最近、大学生や社会人の方から「昔、私この講座を受けました」という話をお聞きすると、世代が代わり、その方が親の世代になりつつあるのだなと思っている。二世代にわたって続けていくことの重要性を感じており、この事業は続けていきたいと考えている次第である。ただ、幼稚園児や小学生というと、与えることに対しての吸収性があるが、中学生から高校生にもなると自我意識が育ち、親の言うことをなかなか聞かなくなったり、先生の言うことに意味を見出せなかったりするということもある。家庭教育にはそのあたりが少し疎かになっているところがあるのではないかと思います、その課題もこれから踏まえていければいいと思った。

また、今、スマホの件と読書の件についてお話をいただいたが、先日9月12日に村山地区の家庭教育フォーラムがあり、そこで村山市の楯岡中学校の取り組みについて事例発表を頂いたもので、紹介させていただきたい。平成28年度から29年度に文部科学省の生涯学習関連の補助金を頂き、「むらやまっ子パワーアッププロジェクト」に取り組んだそうである。どのようなものかというと、子育て5箇条のところにも様々書いてあるが、今回、村山市では、早寝早起き、つまり睡眠をとることによってスマホなどの利用時間を減らして、家庭の会話や読書を増やそう、ということで取り組んだとのことだった。具体的にどういうことをしたかということ、子どもたちに「今日は何時に起きて何時に寝たか」ということを毎日書いてもらうシートを市

で作って、先生方は大変だったと思うが、それを先生方が毎日チェックした。シートを書くことによって、自分がいかに不規則な生活をしてきたか、いかに時間を無駄に使っていたかということ、まず子どもたちに自覚させ、「これを減らすにはどうしたらいいと思う？」という問題提起を行い、自分で「僕はスマホを使う時間が長いから、2時間を1時間に減らして、睡眠時間を増やしたい」とか「僕はどちらかというと朝が得意だから、朝早く起きて勉強するためには、夜もう1時間早く寝なきゃいけない」とか、そういうことに気づいてもらう取組みを初年度に行ったとのことである。次の年は、それを小学校にも広げたそうである。そうすると、小学校と中学校の兄弟姉妹がいる家庭では、「パワーアップウィーク」の時に一緒に頑張れるということである。本当に地道な取組みであるが、3年目に入り、子どもたちの意欲が断然変わってきたという話を聞いた。子どもたち、保護者の方、先生方の負担は大きくなったという話ではあるが、それ以上に、目に見えて子どもたちの表情が変わってきたという話も聞いたので、やはり地道な活動は必要なのではないか、と感じた。寝ることから全ては始まるというように、まずは一つのことに取り組むことが、問題解決への近道なのかなというお話を頂いて、自分自身勉強になったので、皆様にお伝えした次第である。

②-1 青少年期の教育関係 等

齋藤座長

3ページの青年期の教育について私も書いたので、話をさせていただきたい。本県の地域青少年ボランティア、高校生の地域でのボランティア活動というのは、全国でも珍しい、本県の宝物ではないかと思っている。ただ、ずっと前から見ると、私は30年程前から関わっているが、少しずつ停滞しているのではないかと感じている。反対に学校の方では、部活やクラスなどでボランティアを取り上げているという話を聞く。ただ、本来のボランティア活動というのは、自主性・自発性が大事なので、「部活で決めたからボランティアをきなさい」というものではないと思う。自主性・自発性のあるボランティアというのは、地域の中で子どもたちが自由に考え、自由に発想して進んでいくということが基本ではないかと思う。そのような面で、高校の先生方や一般の方々には、もっと本県の「山形方式」と言われている高校生ボランティアの活動を理解していただく必要がある、そして、側面から応援していただきたいと思っている。ぜひリーフレットのようなものを作って、理解を広げていければよいと思ったところである。可能であれば、そのようなことをお願いしたい。

小林委員

新聞社に勤めている関係で書かせていただいたという意味もあるが、先程のスマホ漬けの生活から離れるという意味もあって、提案気味に「新聞の活用」ということを書かせていただいた。最近の若い世代は特に、新聞離れ・活字離れが急速に進んでおり、新聞はどういう読み方をするのかということも分かっていない方も多い。そこで、新聞をどのように読めば効果的に読めるのか、新聞はどういう記事で成り立っているのかということも含めて、社員が出向いて講座を開かせていただいている。本日、手元にも一枚、その講座の記事のデータをつけていた

だいた。普段は小学校、中学校、希望があれば企業にも出向いて講座を行っているが、新たにお母さん方にも講座に参加していただいて、新聞の読み方を分かりやすく知っていただくという取り組みを行っている。今、若い世代と言ったが、だんだんとその若い世代も子どもを持つ世代になり、親御さんになり、新聞はあまり馴染みがないという世代が増えているのが現状である。我々としては、活字・新聞に広く親しんでほしいという意味合いで、基本的な新聞の活用の仕方をお話しているところであり、これからも続けていきたいと思っている。新聞を有効に活用し、時事問題に対する関心を深めるということは、社会に対する目を養うということになると思うので、子どもが成長していく中で必ず役に立つと思っている。そのような思いで、ここにも書かせていただいた次第である。

廣木委員

4ページの2番のところに「金銭感覚に関する教育について」ということで意見を書かせていただいた。昨年度まで、若者の就労支援に関わる事業を担当していたため、この件はずっと気になっていた。就労支援で関わる若者たちの金銭感覚に関する知識が非常に乏しい。そもそも自分が年金の保険料を払っているのか、親が払ってくれているのか、それとも払っていないのか、ということも知らない。車は持っているけれども、全部家族が維持費を負担してくれているので、車に乗るのにどのくらいのお金がかかっているのか知らないなど、全員ではないが、多くの方が実家で暮らしているという状況もあり、こちらから見ても心配だなと感じる人が多いのが現状である。実際に、こちらの支援を経て就職したとしても、金銭管理に関する意識が十分ではなく、給与明細に一度も目を通したことが無い方や、見方が分からない方、貯金をどのくらいすればよいのか分からなくて使ってしまう方など、そういう話もよく伺うことがある。本来、学校で教えてもらうものではないかと思うが、家庭教育の一つかなとも思う。しかし、家庭でもお金についての話を避けるような状況があったり、支援が必要な世帯では保護者自身も家計の管理が十分にできていなかったりすることもある。私自身もこれまで習ったというのではなく、必要性が出てくるたびに調べていたが、調べても分からないこともあったり、そもそも誰に相談すればいいのか、どこに聞けばいいのかも分からなかったりするなど、情報として足りない分野であると感じている。情報が足りない反面、社会はキャッシュレス化が進んでいたり、子どももゲームの課金をするような時代になっていたり、大きく変わってきている。社会保障制度や保険の仕組みも大きく変化しているということも踏まえ、子どもの頃から、ライフプランをどう考えていくかということについて学ぶとしたら、やはり社会教育の枠になるのかと考え、ここに書かせていただいた。

②-2 成人期・高齢期の教育関係 等

二瓶委員

40代・60代からの学び直しがよく話に出てくるが、特に男性を中心に、社会とあまり関わりがなく、会社の中の付き合いだけで生きてきている方が多いのかと思う。女性は割とお茶飲みや女子会など、他の人と関わる機会があると思う。その中で、習い事を始めたり、スポーツクラブに行ってみたり、世界がどんどん広がっているような気がするが、男性はなかなかそ

ういう例を見かけないと思っている。

「学び直しはいいよね」とは言っても、なかなかそういう機会がない人がいきなり「どうぞ」と言われても、難しいのではないかと。そこで、背中を押すような講座を設定してそれを紹介するなど、行政のほうが少しケアしてあげたらいいのではないかと思った。そういうことをしていれば、それをきっかけにして、いずれ時間の空いた時に地域で何かやってみようとか、学校でボランティアを募集している時に、自分はこれができるから何か手伝いしてみようとか、というところにつながっていけばよいと思っている。この点について、ぜひ何か考えてあげてほしい。

齋藤座長

今の話題については地域ボランティア人材発掘に関係する。教職員だけではなく、もっと幅広い、会社に勤めている人などもどうしていけばよいのか、二瓶委員の発言のような形で考えていけばよいと思う。

その他、高齢者教育については、本日欠席の田中委員が提出した資料もある。その中に、名前も大切ではないか、講座名やイベントの名づけ方というのも大事だとありますので、例えば「老人大学」というよりも「シルバー大学」といった意見ではないかと思っている。

③学校・家庭・地域の連携 等

二瓶委員

学校支援地域本部・地域学校協働活動のことについてだが、この活動が始まってすでに10年が経過し、県内各地の様々な小中学校・地域等で盛んに行われるようになってきたと思う。それはそれで、学校支援地域本部というところから地域学校協働活動に移行していくという形で、発展的に進んできているということは喜ばしいことだと思うが、一方でまったく行われていない地域もある。

自身でやっていて、学校・先生方にとって非常によい事業であるし、地域の方の「学校を支援したい」という気持ちにピッタリ合ったいい活動だとは思う。しかし、例えば山形市のような都市部においては、マンションや新興住宅地に住んでいると、なかなか地域というものがないような感じになっているようである。ただ、それなら都市部では何にもしていないのかというと、読み聞かせだけはしている、子どもの見守りだけはしている、などというようなところがたくさんあると思う。町村部のようなフルサイズの立派な活動でなくても、都市部でもできる「限定的」「薄型」のものがあってもいいのではないかと考えている。できないことまで求めても仕方がないので、できることを進めて、少しずつでも広げていけばよいのではないかと思った。

資料の後半の方で、少子化の話題も書いたが、それもやはり、子どもが少ないのだから今後は仕方がない、というのではなく、子どもを増やす算段、子どもが少なくても元気になっていける地域など、できないことを数えるのではなく、できることに目を向けて進んでいけたらよいと思った。

佐藤委員

今の話題で付け足しをしたいと思う。我々親も、子どもたちの立哨指導や、見送りやお迎えなどの要請が学校側からあるので、朝早くから起きて、交差点に立って子どもたちを指導するというのも、地道な活動の中でやらせていただいている。決して泣き言を言うわけではないが、子育てをしている世代というのは本当に忙しい。朝早くから夜遅くまで忙しいということもあると思う。そこで、地域のリタイアした方や、時間に余裕のある方が、もしそういったこと（立哨指導等）を積極的に取り組んでくれたら、どんなにありがたいかと思った。町内会の中には、子ども会担当の役員がいらっしゃると聞いている。そういった方々がもっと積極的に出てくれたら本当にありがたいというのがまず一点目である。

それから、先日秋田で開かれたPTA東北大会に参加をしてきて、秋田の現状をいろいろ伺ってきたが、やはり少子化・過疎化の影響で、かなりの小学校が統廃合しているとのことだった。その中で、小学校と中学校を一緒にするという動きがかなり現実味を帯びてきているというような話も聞いてきた。こうなるとエリアも再編になるし、学校も新しく小学校と中学校両方使えるものを用意しなければならず、かなりハードルが高いが、中高一貫よりは小中一貫のほうが現実的だということ初めて聞き勉強になった。今後子どもたちを取り巻く環境が大きく変化をしていく中で、我々もそれについていかなければならないということを考えると、色々なところに向いて色々な情報を持ってきて、それをまた落とし込みをするということが本当に大事だと感じている。

それに関して、山形では小中一貫についての動きがもしあったら教えていただきたい。

齋藤座長

小中一貫は、新庄で萩野学園がそうになっている。明倫中と沼田小・北辰小が何年か後に統合するが、そこも小中一貫校ということで動いている。その他、新庄以外でどこかあるだろうか。義務教育課でおさえている情報は？

回答（義務教育課高橋主任指導主事）

正式に聞いているところは無いが、校舎を1つにしない併設型という形で、小規模の学校で検討しているという動きはあると聞いている。

齋藤座長

現在でも少しずつ動きはあるというところで御理解していただければと思う。

高橋一枝委員

ちょうど新庄市の明倫の小中一貫校の策定委員会にも入っており、様々動いているのだが、萩野学園の方ではコミュニティスクール・地域本部事業の方から早速動いていて、PTAではなくてPTOという協議会形式で、私たちスタッフが関わりながら共に学校運営に携っている。PTA活動が少しずつ変化しているということで、明倫の小中一貫校の中では、そちらの方の取組みも整えながら進んでいるような状況である。

齋藤座長

高橋委員、「ジモト大学」のことも説明をお願いしたい。

高橋一枝委員

地域との連携・協力の推進のモデルというか、新庄でやっている取り組みの中で、「ジモト大学」という、高校生が地元に戻ってきてくれる仕組みづくりを、地域の大人と行政と学校が連携しながら開催している。資料の中央にプログラムがあるが、去年は11プログラムだったのが、今年は21プログラムの開催となっている。高校・行政・家庭・生徒・地元の大人が関わるという構成だが、去年は500人の生徒・大人が関わりながら、地域の魅力や地域のことについて知っていく、という内容で大盛況だった。それがあって今年は21プログラムということになった。

文科省が来年度高校を拠点とした地方創生の事業の中で、高等教育機関がない人口減少地域で、高校に探究型の授業を入れるモデル校を全国から50校選ぶと聞いている。本県ではどのような方向で考えているのかということについて少々疑問に思っている。最上地区の高等学校では、早速少し動いているということは伺っているが、そのことについて教えていただきたい。

「ジモト大学」プログラムは半分終わったところだが、やはり高校生には学ぶ気と聴く気がある。その中で地域の方々と触れ合うことで、新庄市や最上町、大蔵村などの魅力、それから地域産業や伝承野菜などに触れることができ、「(地元は)また帰ってきたい場所なんだな」という気づきがあるようだ。さらに高校生だけではなくて、実は大人の方も、ワークショップや意見・アイデア出しなどに高校生と一緒に参加することで、学ぶことができる素敵な場所になっていると考えている。

齋藤座長

その他の高校はどうなっているだろうかという疑問があったが、高校教育課は出席していないので、学校から参加なさっている両委員から御意見を頂戴したい。分かる範囲で結構なので、津田委員、今のようなことについて何かあるだろうか。

津田委員

具体的には動いている学校もあると聞いているが、どこが正式に名乗りをあげているかということは聞いていない。もし手を挙げるとしても、小規模校は教員の数が少なく、いっぱいやっていっている中で、文科省から「お金をつけるから研究を」と言われても、仕事が増えることに二の足を踏むということが確かにある。高校で何か手を挙げるときは、それによって加配の教員がつくというような事業だとどんどん立候補するが、それがないと、今以上仕事が増えるのはちょっと無理だという状況になってしまう。

「ジモト大学」は、非常に素晴らしい取り組みだと思っている。ただ、私も24年度、真室川で校長をした時に、就職で、当時今ほど売り手市場ではなかった中で、生徒本人は地元に残りたい気持ちもあるが、親御さんが「(地元の)あそこの会社はリーマン(ショック)の時に隣

の家の人を解雇した」、「もっと安定した（地元ではない）ところに行きなさい」という意向を持つような状況があった。実はこの傾向は現在の売り手市場になっても残っているので、地元の求人枠がなかなか埋まらないということになっている。

もう1つ、「親元から通えれば給料が少しぐらい安くてもかまわない」という話もよくあるが、実家から職場に行くためには車を買わなければならない。その維持を考えると、アパート代を払って電車で通勤して、給料の高い東京で暮らした方がよいという生徒も、実際にいる。これは山形近隣の高校の話だが、庄内はもっと県外流出が多いということで、やはり生徒が同じような意見を持っていて、しかも親御さんの中には今でも「次男坊だから、出ていった方がいいんじゃないか？」というような御意見をお持ちの方もいると聞いている。このあたりは、我々高校サイドにとってもなかなか難しく、あまり保護者の意向に反することを言えないという部分もあり、非常に苦慮している。「地元定着」とここ数年ずっと言われていて、何とかしなければという意識は高校サイドでも非常に強い。だが、実際に生徒・保護者と対面していくと、今述べたような実態もあり、どういう切り口が必要なのかなということを実際に日々悩んでいる状況である。

余計なことまで申し上げたが、ありがとうございました。

齋藤座長

高校でも色々な悩みがあるということだった。親御さんとの関係ということもあり、大変なことだということで、認識を新たにした。

では中学校の方から、高橋委員、何かあるだろうか。

高橋政吉委員

先ほど津田委員もおっしゃったように、中学校も、部活動や色々なことがあって、正直言って、いっぱいいっぱいである。小と中の両方の校長を経験したが、小学校は地域との様々な事業も盛んに行われているし、地域の方々から子どもを見守っていただけて子どもが成長していく様子が非常によく分かる。一方、中学校は部活動などがあり多忙で、今は読書活動もままならないというような状況で、現場は非常に厳しいと感じる。学力についても指摘されるし、とにかくやらなければならないことがたくさんあり、何を目玉にして学校経営をしていけばよいかということが今一番悩んでいる点である。

現場は本当に忙しくて、職員が悲鳴をあげているのに教員の数はずいぶん減っている。私は現在の学校に20年前にもお世話になっていて、その当時から比べると、今は生徒数が半分になっている。だが、部活動の数は変わっていない。簡単にはなくせない。そうすると、複数顧問制など言われているが無理がある。このような状況なので、子どもの数が減ってくると、非常に厳しいことになってしまうというのが、正直な実態である。だから、地域の方々から、部活動指導員などで御協力をいただきながらやっていかないと、学校の部活動も今後非常に難しくなってくるというところで、悩んでいる。

齋藤座長

学校は非常に忙しいということで、それでは地域で子どもたちをどのようにして育てていっ

たらいいのかということを見ると、地域の人たちの活躍の場であると思う。私は町内会長もやっていて、町内のお祭りの時には、盆踊りの合間に中学校、高校の吹奏楽の生徒に演奏してもらっている。また、じいちゃん・ばあちゃんたちのサロンをやっているが、年1回、8月の休みには子どもと高齢者がふれあう日・遊ぶ日を設けており、それも地域の中で子どもたちを活躍させていこうという目的でやっている。ただ、その活動したことをそのままにしておくのではなく、学校に還元している。校長先生に、「こんなに頑張っている子どもが地域にいるのだよ」ということを報告している。そんな形で学校と地域の結びつきを少しでも作っていきたいと思っている。

④社会教育施設・社会教育主事・その他社会教育一般 等

事務局より説明（木村室長）

齋藤座長

何年か前の例だが、島根県では数年前でも派遣社会教育主事制度が行われていた。市町村から負担金を出してもらった仕組みで、市においては給与の2分の1を出す、町村においては3分の1を出す、それ以外は県で負担する、という形だったかと思う。そういうところが他の県にもあるのかどうか、私は分からないが、参考にさせていただければと思う。

佐藤委員

P T Aは全国に850万人の会員がいる日本で最大の社会教育関係団体である。東北大会が先週あり、8月には全国大会があった。そして10月には山形県の大会があるというように、各地域等で各大会を開催している。内容としては、分科会があってそれから全体会という流れだが、分科会は特に色々と的を絞っていて、様々な方々のお話を聴いたり、ワールドカフェでみんなが意見を出し合ったりと考えられた構成で、内容のある会議になっている。先日の秋田大会でもワールドカフェに参加したが、保護者の皆さんが真摯に議論を交わされている姿を見て、とても頼もしいと感じた。

私が思うに、互いを信頼し合うP T Aというスローガンを書いたが、ここには、親と学校もしくは先生方との信頼関係をもっと築いていきたいという思いがある。やはり何事も信頼関係がないと前に進まない、大きなことはできないのではないかと感じている。昨今は、なぜか少しそこに壁を感じてしまっている。だから、そういった大会にぜひ先生方にも多数参加してもらって、もっと親と一緒にいろいろ物事を考えていただけたら、環境も変わってくるのではないかと感じている。

それと、ここに書いた「ありがとうボックス」については、別添のA4のチラシを準備したので、そちらをお読みいただきたい。このような取組みを通し、いじめの撲滅を目指して、子どもたちの良いところにスポットを当てて、みんなで褒めて伸ばしましょうということで活動をしている。御一読いただければと思う。

多くの先生方がおいでの中でこのようなことを言うのもどうかと思うが、やはり教育に関しても、幼児教育も含めて、小学校・中学校の教育というのはとても大事なのだろうと思っ

ている。いじめ問題で言えば、いじめが大きくなる前に芽を摘むということについては、やはり小さい時から「いじめはダメだよ」、「卑怯なことはしちゃいけないよ」と、会津藩士什の掟にもある「ならぬことはならぬ」ということをしっかりと教えていただければ、子どもたちも絶対に理解してくれるのではないかと思っている。それと同時に家庭教育という観点から、親の方の自覚も大事になっていくのだろうと思っている。子どもと真剣に向き合うこと、自分の後姿を見せること、というような話が先日も多く出ていた。大人になったら結婚をして、そして家族が増えたら自分もPTA活動や子ども育成会、町内会など、色々なところでボランティア活動をしなくてはならないというのは、口で言うよりも親の後姿で感じてもらえるように、そんなことも必要なのではないかと感じている。

最後になるが、先日新潟県長岡市で開催された全国大会の折に、米百俵の話は何度となく聞いて刷り込みをされてきた。教育は未来への投資であるということであるので、そこをしっかりと親も家庭教育の中で子どもと一緒に向き合っていかなければならないと感じている。

齋藤座長

私も若い時に聞いて何だろうと思ったことがあった。「ぱっと楽しく遊ぶ会（PTA）」などと言われることもあるが、そうではなく、PTAのPは、親である。親と教師の会なので、やはり、親だけではダメなのだ。先生と親と一緒に話をして子どもたちのために活動するというのがPTA本来の姿ではないかと、今また思い直したところである。

私の方からも1つ。自分が住む町内の子どものことだが、町内会の世帯数が100足らずで、子どもが本当にいなくなってしまう。隣の町内と2つ合わせても小学校の子どもがいる家庭が7軒・9人、という状態である。そこで子ども会活動はというと、リサイクル活動を年間3回やっている。夏休みのラジオ体操もない。「子ども会活動やってるの？」と聞くと「何もしてない」、そういう状況である。私の町内だけではなく、それ以外のところも、大概そのような状況ではないかと思う。子ども会の本来の姿というのは、地域の中で子どもたちの生き生きとした姿を子どもたち自身が作っていくというのではないかと思うが、それがなくなってきている。県子ども会連合会の中では様々な活動がなされているとは思いますが、残念ながら最上地区で県子連に入っている市町村は鮭川村だけである。そのような状況で、地域の中で子どもを活かす、高校だけではなく、小学校の子どもたちをどう活かしていくのか、そういうことを本気で考えていく時期に来ているのではないかと私は思っている。それを、社会教育の中でどのような形で行っていけばいいのか。そんなことも今後考えていく必要があるのではないかと感じた。

小田島委員

行政資料の連携協働推進のところに、本部の事業が書いてあり、その中で、市町村の実態を把握するという教育事務所の役割があるが、私は個別の事業どうこうではなく、市町村の事業と県の事業がどう関わっているのかに関心がある。もちろん地方公共団体として県と市町村は別であるから、市町村は独自に事業を行っても構わないと思う。ただそういった時に、各教育事務所がきちんと市町村との連携の中でサポートできる体制があるのか、もしくは、今様々な御意見があったような問題に対して、どう現実的に受け止めているのか、そのあたりを、県の

仕事として、県の社会教育主事もしくは社会教育委員の仕事として、考えていかなければならないのではないかと。私自身も様々な市町村にいて、色々な経験をしてきたが、何か県の方が見えない。県が何をしているか、様々な資料や図をもらうが、見えない。結局、自分のことしか考えていないというのが実態だと思う。予算も含めて、そのあたりをつなぐのが教育事務所の一番大きな課題・役割だろうと思っているので、そこに大きな期待を持ちたいと思う。

齋藤座長

教育事務所の方々も出席している。このような意見をどのように咀嚼していくかということで、よろしくお願ひしたいと思う。それから、資料にある中でまだ県立図書館の問題についてまだ意見を頂戴していないが大丈夫か。

ここに書いてあるので大丈夫ということでもよろしくお願ひしたい。

では、その他にここまで言い忘れたというようなことはあるか。

二瓶委員

社会教育主事のことに関して、本日は安藤委員がいらっしゃらないので、代わりに私が一言申し上げたい。

先日、コーディネーターと社会教育主事の合同の研修会があって、そこに行ったところ、一緒に読み聞かせをしているメンバーの人にばったり会った。「何、こんなところで」と言ったら、向こうも「え、何でここにいるの」という話になり、聞いてみると、彼女は社会教育主事だった。私は10年間も一緒に読み聞かせをして、彼女と毎週のように会っていたのだが知らなかった。

学校に行っても同様だが、誰が社会教育主事なのか、どんな仕事をしているのかということが全く分からない。せつかく苦勞して努力して主事の資格を取っているのに、それを取ったことによるメリット、資格を持っているメリットは何かあるのだろうか、発揮できる場があるのだろうか、と思っている。例えば、「この人は社会教育主事で、やっぱりすごいね」みたいに言ってもらえるような場があると、主事資格を取ってみたいと思う。逆に、「社会教育主事はどなたがやっているのですか?」「さあ?」などと言われているようでは、いくら枠があるから頑張っ取って下さいよ、と言われても、ちょっと難しいだろうと思う。輝ける場があったらいいと思うので、そういうところに御配慮をお願ひしたいと思う。

齋藤座長

ありがとうございました。力強い意見だった。社会教育主事有資格者をいかに「見える化」していくか、ということだと思う。

事前に出された意見については、おそらく安藤委員から出ていると思われる、研究セッションの設置というものが残っている。以前も何回か取り上げられたが、県の教育センターにも社会教育担当者が配置されていないということで、そのような研究を行う場が必要ではないかと、私も同意見だ。よろしくお願ひしたいと思う。

皆様からいただいた御意見についての話し合いはここで閉じたいと思う。

(3)その他

全国学力学習状況調査の結果について
資料説明（義務教育課 高橋主任指導主事）

6 連 絡（事務局）

後日「議事概要」を出席者に送付

次回（185回）：平成31年2月14日（木）に開催予定

（生涯学習検討委員会を兼ねて開催する。）

7 閉 会